

準同型定理

定義 1 G, G' がそれぞれ演算 $\cdot, *$ について群をなし, 写像 $f: G \rightarrow G'$ が $\forall a, b \in G$ について

$$f(a \cdot b) = f(a) * f(b)$$

を満たすとき, f を G から G' への準同型写像 (homomorphism) という.

例 1 $C^\times = C - \{0\}, R^\times = R - \{0\}$ はともに乗法 \cdot について群である. 今, 写像 f を

$$\begin{aligned} f: C^\times &\rightarrow R^\times \\ z &\mapsto f(z) = |z| \end{aligned}$$

とすると, f は準同型写像である.

例 2 R は加法 $+$ について群である. $R^+ = \{x | x > 0, x \in R\}$ は乗法 \cdot について群である. 今, 写像 f を

$$\begin{aligned} f: R &\rightarrow R^+ \\ x &\mapsto f(x) = e^x \end{aligned}$$

とすると, f は準同型写像である.

定理 1 演算 \cdot について e を単位元とする群 G から, 演算 $*$ について e' を単位元とする群 G' への準同型写像 $f: G \rightarrow G'$ について次のことが成り立つ.

1. $f(e) = e'$
2. $f(a^{-1}) = f(a)^{-1}$

[証明]

1.

$$\begin{aligned} e \cdot e &= e \\ f(e \cdot e) &= f(e) \\ f(e) * f(e) &= f(e) \\ \{f(e) * f(e)\} * f(e)^{-1} &= f(e) * f(e)^{-1} \\ f(e) * \{f(e) * f(e)^{-1}\} &= f(e) * f(e)^{-1} \\ f(e) * e' &= e' \\ \therefore f(e) &= e' \end{aligned}$$

[証明おわり]

2.

$$\begin{aligned} a \cdot a^{-1} &= e \\ f(a \cdot a^{-1}) &= f(e) \\ f(a) * f(a^{-1}) &= e' \\ f(a)^{-1} * \{f(a) * f(a^{-1})\} &= f(a)^{-1} * e' \\ \{f(a)^{-1} * f(a)\} * f(a)^{-1} &= f(a)^{-1} * e' \\ e' * f(a)^{-1} &= f(a)^{-1} * e' \\ \therefore f(a^{-1}) &= f(a)^{-1} \end{aligned}$$

[証明おわり]

つまり単位元は単位元に写り，逆元は像の逆元に写るといわけである．

定理 2 f を群 G から群 G' への準同型写像とする． H が G の部分群ならば $H' = f(H)^{*1}$ も G' の部分群である．

[証明]

$$\begin{aligned} a, b \in H &\implies f(a), f(b) \in H' \\ f(a)f(b)^{-1} &= f(a)f(b^{-1}) = f(ab^{-1}) \end{aligned}$$

H が G の部分群なので，

$$\begin{aligned} ab^{-1} &\in H \\ \therefore f(ab^{-1}) &\in H' \end{aligned}$$

よって H' は G' の部分群である．

[証明おわり]

定理 3 演算 \cdot についての群 G と，演算 $*$ についての群 G' がある． f は $G \rightarrow G'$ の準同型写像で，全射であるとき， H が G の正規部分群ならば $f(H)$ も G' の正規部分群である．

[証明] $\forall g' \in G', \forall h' \in f(H) \implies g'^{-1} * h' * g' \in f(H)$ であることをこれから証明する．

$\forall g' \in G', \forall h' \in f(H)$ について， f は全写なので

$$f(g) = g' \ (\exists g \in G), f(h) = h' \ (\exists h \in H)$$

と書くことができる．

$$\therefore g'^{-1} * h' * g' = f(g)^{-1} * f(h) * f(g)$$

f は準同型写像なので

$$f(g)^{-1} * f(h) * f(g) = f(g^{-1}hg)$$

h は正規部分群 H の元なので

$$\begin{aligned} g^{-1}hg &\in H \\ \therefore f(g^{-1}hg) &\in f(H) \end{aligned}$$

^{*1} $f(H) = \{f(h) \mid h \in H\}$ と定義する．

$$g'^{-1} * h' * g' \in f(H)$$

[証明おわり]

定理 4 f を群 G から群 G' への準同型写像とすると、

$$\{k \mid f(k) = e', k \in G\}$$

を f の核 (kernel) といい、 $\text{Ker}.f$ と表す^{*2}。ただし、 e' は G の単位元である。

当然 G の単位元 e も $\text{Ker}.f$ に含まれるがそれ以外にもある可能性がある。 f が単射であれば $\text{Ker}.f = e$ である。

定理 5 準同型写像 $f : G \rightarrow G'$ の $\text{Ker}.f$ は G の正規部分群である。

[証明] 部分群であることの証明。 $K = \text{Ker}.f$ とし、 G' の単位元を e' とする。今 $\forall k_1, k_2 \in K$ とすると、

$$f(k_1 \cdot k_2^{-1}) = f(k_1) * f(k_2)^{-1} = e' * e'^{-1} = e'$$

核の定義より

$$k_1 \cdot k_2^{-1} \in K$$

よって $\text{Ker}.f$ は G の部分群である。

正規部分群であることの証明。 $\forall g \in G$ について

$$\begin{aligned} f(g^{-1} \cdot k \cdot g) &= f(g)^{-1} * f(k) * f(g) = f(g)^{-1} * e' * f(g) = f(g)^{-1} * f(g) = e' \\ \therefore g^{-1} \cdot k \cdot g &\in K \end{aligned}$$

よって K は G の正規部分群である。

[証明おわり]

例 3 乗法群 C^\times から乗法群 R^\times への準同型写像

$$\begin{aligned} f : C^\times &\rightarrow R^\times \\ z &\mapsto f(z) = |z| \end{aligned}$$

について、 R^\times の単位元は 1 であるから、 $\text{Ker}.f = \{z \mid |z| = 1, z \in C^\times\}$ 。あるいは $\text{Ker}.f = \{a+bi \mid a^2+b^2 = 1, a, b \in R\}$ である。

例 4 加法群 R から乗法群 R^+ への準同型写像

$$\begin{aligned} f : R &\rightarrow R^+ \\ x &\mapsto f(x) = e^x \end{aligned}$$

の場合、 R^+ の単位元は 1 であり、 $\text{Ker}.f = 0$ である。

定義 2 準同型写像 $f : G \rightarrow G'$ が全単射であるとき、 f を同型写像 (isomorphism) という。また、 G, G' について同型写像 $f : G \rightarrow G'$ が存在するとき、 G と G' は同型 (isomorphic) であるといい、 $G \cong G'$ と表す^{*3}。

^{*2} ほかに $\text{kernel}(f)$ などと表す場合もある。

^{*3} $G \sim G'$ あるいは $G \approx G'$ などと表す場合もある

例 5 例 4 の準同型写像

$$f: \mathbf{R} \longrightarrow \mathbf{R}^+ \\ x \longmapsto f(x) = e^x$$

は全単射であるので f は同型写像である。つまり $\mathbf{R} \cong \mathbf{R}^+$ である。

例 6 加法についての群 \mathbf{Z} からその部分群 $2\mathbf{Z}$ への写像

$$f: \mathbf{Z} \longrightarrow 2\mathbf{Z} \\ n \longmapsto f(n) = 2n$$

を考えた場合、 $f(n+m) = f(n) + f(m)$ が成り立つので、 f は準同型写像である。また f は全単射であるので同型写像である。よって $\mathbf{Z} \cong 2\mathbf{Z}$ である。

問題 1 複素数全体の集合 \mathbf{C} は加法について群である。また $M = \left\{ A \mid A = \begin{pmatrix} a & -b \\ b & a \end{pmatrix}, a, b \in \mathbf{R} \right\}$ も加法について群である。このとき写像

$$f: \mathbf{C} \longrightarrow M \\ a + bi \longmapsto \begin{pmatrix} a & -b \\ b & a \end{pmatrix}$$

が同型写像であることを示し、 $\mathbf{C} \cong M$ を示せ。

[証明] $f(a + bi + c + di) = f(a + c + (b + d)i) = \begin{pmatrix} a + c & -(b + d) \\ b + d & a + c \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} a & -b \\ b & a \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} c & -d \\ d & c \end{pmatrix}$ である

から f は準同型写像である。また $\begin{pmatrix} a & -b \\ b & a \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} c & -d \\ d & c \end{pmatrix}$ であれば $a + bi = c + di$ となるので単射である。

また $A = \begin{pmatrix} a & -b \\ b & a \end{pmatrix} (\forall a, b \in \mathbf{R})$ に対して $z = a + bi$ とおけば $f(z) = A$ が成り立つので全射である。よって f は同型写像であり、 $\mathbf{C} \cong M$ である。 [証明おわり]

定理 6 準同型定理 f を群 G から群 G' への全射準同型写像とする。 $K = \text{Ker}.f$ とし、 G/K を G の K による剰余群とすると、

$$G/K \cong G'$$

が成り立つ。

[証明]

$$f: G \longrightarrow G' \\ a \longmapsto f(a)$$

をもとに、写像

$$\tilde{f}: G/K \longrightarrow G' \\ Ka \longmapsto \tilde{f}(Ka) = f(a)$$

を考える．剰余類の演算の定義より，

$$\tilde{f}(Ka \cdot Kb) = \tilde{f}(Ka \cdot b)$$

$\tilde{f}(Ka) = f(a)$ より，

$$\tilde{f}(Ka \cdot b)$$

f は準同型写像なので

$$f(a \cdot b) = f(a) * f(b)$$

$\tilde{f}(Ka) = f(a)$ より，

$$f(a) * f(b) = \tilde{f}(Ka) * \tilde{f}(Kb)$$

よって \tilde{f} は準同型写像である．

$\forall a, b \in G$ について

$$\tilde{f}(Ka) = \tilde{f}(Kb)$$

とすると， $\tilde{f}(Ka) = f(a)$ より，

$$f(a) = f(b)$$

右側より $f(b)^{-1}$ を演算させると，

$$f(a) * f(b)^{-1} = e'$$

ただし， e' は G' の単位元．準同型写像の性質を用いて

$$f(a) * f(b^{-1}) = e'$$

$$\therefore f(a \cdot b^{-1}) = e'$$

$$\therefore a \cdot b^{-1} \in K$$

$$a \equiv b \pmod{K}$$

$$\therefore Ka = Kb$$

つまり $\forall a, b \in G$ について

$$\tilde{f}(Ka) = \tilde{f}(Kb) \implies Ka = Kb$$

が示せたので \tilde{f} は全射である．よって \tilde{f} は同型写像で

$$G/K \cong G'$$

が成り立つ．

[証明おわり]

問題 2 $T = \{z \mid |z| = 1, z \in \mathbb{C}\}$ とするとき次の問いに答えよ．

1. 乗法に関して T は \mathbb{C} の部分群であることを示せ．
2. \mathbb{R} は加法 $+$ について群をなし， T は乗法 \cdot について群をなす．今，

$$f: \mathbb{R} \longrightarrow T$$

$$\theta \longmapsto f(\theta) = \cos 2\theta\pi + i \sin 2\theta\pi$$

と定義するとき， f は全射準同型写像であることを証明せよ．

3. $\text{Ker.}f$ を求めよ .
4. $\mathbf{R}/\mathbf{Z} \cong T$ を証明せよ .

[解]

1. $|z| = |w| = 1$ とするとき $|zw^{-1}| = |z||w|^{-1} = 1$ であるから $zw^{-1} \in T$. よって T は C の部分群である .
- 2.

$$\begin{aligned} f(\theta_1 + \theta_2) &= \cos 2(\theta_1 + \theta_2)\pi + i \sin 2(\theta_1 + \theta_2)\pi \\ &= (\cos 2\theta_1\pi + i \sin 2\theta_1\pi)(\cos 2\theta_2\pi + i \sin 2\theta_2\pi) \\ &= f(\theta_1) \cdot f(\theta_2) \end{aligned}$$

よって f は準同型写像である . また $\forall z \in T$ について $z = f(\theta)$ ($\exists \theta \in \mathbf{R}$) と表せるので全射である .
よって f は全射準同型写像である .

3. T の単位元は 1 である . よって $\text{Ker.}f = \{n \mid n \in \mathbf{Z}\} = \mathbf{Z}$ である .
4. 準同型定理より明らか .

例 7 剰余類群 (整数全体の加法群 \mathbf{Z} から作られる剰余類の作る群 , residual class group of the additive group) は , 次のように定義される .

m を与えられた整数 (普通は $m \geq 2$) とするとき , m で割って k 余る整数全体の集合を \bar{k} と表し ,

$$f: \mathbf{Z} \longrightarrow M = \{\bar{0}, \bar{1}, \bar{2}, \dots, \bar{m}\}$$

を考える (言い換えると , 全ての整数に m についての剰余類を対応させる) と

$$\text{Ker.}(f) = \{x \mid f(x) = \bar{0}\} = \{km \mid k \in \mathbf{Z}\} = m\mathbf{Z} (= \bar{0})$$

よって準同型定理より

$$\mathbf{Z}/m\mathbf{Z} \cong M$$

これは一般の剰余類群の起源である . 剰余類 $\mathbf{Z}/m\mathbf{Z}$ は \mathbf{Z}/m と表すことも多い .

参考文献

- [1] 石村園子 『すぐわかる代数』(東京図書 , 2003 年)
- [2] 長岡亮介 『線形代数学』(放送大学教育振興会 , 2004 年)
- [3] 「ウィキペディア」 <<http://ja.wikipedia.org/wiki/>>
- [4] 「Wikipedia」 <<http://en.wikipedia.org/wiki/>>